

# わが国における「アダプテッド・スポーツ」の定義と 障害者スポーツをめぐる言葉

佐藤 紀子

## Defining adapted sports and sports-related terms relevant to people with disabilities

Noriko Sato

### Abstract

The Paralympic Games will be held in Tokyo in 2020. It will be the second time that Tokyo has hosted the worldwide summer games since the 1964 Paralympics. Awareness of the Paralympic Games continues to increase. The Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences, Japan's largest academic organization on physical education, sports, and health science, has recognized adapted sports, a subdiscipline that specializes in sports for the disabled. The term "adapted sports" was proposed in Japan by Yabe in the 1990s, but is less well known than the term "Paralympic Games." In this article, I describe adapted sports according to environmental factors, such as facilities, equipment, rules and techniques are modified in terms of the physical characteristics of participants. In addition to "adapted sports", there are various words related to sports for the disabled, such as universal sports, inclusive sports, para sports, and so on. By looking at how these words are used, the author outlines the state of the current situation of sports for the disabled.

**Key words** : adapted sports, sports for the people with disabilities, アダプテッド・スポーツ, 障害者スポーツ

### 1. はじめに

2020年、東京でパラリンピックが開催される。東京での開催は1964年の第2回大会以来、2度目となり、同一都市での夏季大会開催は初めてとなる。

1964年に発行された「身体障害者スポーツ」(天見, 1964)に、「幸いにこの著書によりわが国の身障者スポーツが誤りない軌道にのり、明朗な環境の下に身障者が社会復帰できることを

切望するものであります」と記されるように、当時、日本での障害者スポーツは幕を開けたばかりであった。

近年、もうひとつの(para)オリンピックとして、パラリンピックは多くの人に知られるようになった。藤田(2016)は、「パラリンピック」という大会名を知っているという人は97.3%と「オリンピック」(98.9%)と並ぶ認知度であることを示している。2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催決定後、多くのオンラ

イン新聞は、「パラスポーツ」や「パラリンピック」という項目を設けている(注1)。また、企業のCMに障害のあるアスリート、パラアスリートが取り上げられるようになり(日本財団パラリンピックサポートセンター, 2016; ブリジストン, 2018), 日常的に障害者がスポーツをする姿を目にする機会も増えている。

さて、「一般社団法人日本体育学会」は、体育・スポーツ・健康科学に関する日本最大の学術団体である。その中に、障害者スポーツを扱う分野として「アダプテッド・スポーツ科学」専門領域がある。

「アダプテッド・スポーツ」という言葉は「パラリンピック」に比べ認知度は低いように思われる。永浜(2013)は、「アダプテッド・スポーツ」について、知っている学生は2.7%にとどまることを報告している。著者の経験からも「アダプテッド・スポーツ」を知っている学生はほとんどいない。

そこで、本稿では我が国における「アダプテッド・スポーツ」の定義を再確認するとともに、障害者スポーツをめぐる言葉から、現在の障害者スポーツの立ち位置を明らかにしていく。

## 2. アダプテッド・スポーツ

### (1) 定義について

「アダプテッド・スポーツ」は、矢部(2004)が提唱した言葉である。英語圏では1970年代から障害者の体育・スポーツは adapted physical activity と呼ばれていたが、これに馴染む訳語がみあたらないため、矢部は意識を試みた。adapted はリハビリテーションやレクリエーションなどと同様に発音式仮名遣いとした。physical activity の直訳である身体活動には、学術用語風の堅い印象があり、体育とすると、実践者の受動的な姿勢がイメージされる。そこで、実践者が主体的に取り組む身体活動とし

て、スポーツという言葉当てはめることにした。adapted physical activity の意識は「その人に合ったスポーツ」になる。そこで、障害のある人や高齢者のスポーツの総称として「アダプテッド・スポーツ: adapted sports」という既成の概念にとらわれない造語を提唱したのである。

最初に矢部が「アダプテッド・スポーツ」という言葉を使用したのは1994年である。

障害の定義は変わりつつあります。最近では、障害のレベルにもとづいた機能障害 (impairment), 機能低下 (disability), 社会的不利 (handicap) による障害のとらえ方が提唱されています。／機能障害は生物学的レベル, 能力低下は人間個体レベル, 社会的不利は社会的レベルとみることができます。このような概念を背景にした中で、体育、スポーツ活動は、低下した日常生活能力や職業能力をいかに環境に適応させるか、いわば人間個体の適応性 (adaptation) を高めることに関わっています。／具体的には、運動の種類や方法を障害の種類や程度、あるいは本人の能力や好みにアダプト (adapt: 適応, 適合, 合わせる) させることです。したがって、障害を持つ人 (低高齢者を含む) を対象にした体育・スポーツをアダプテッド・スポーツ (Adapted Sports), または、障害者スポーツ学と命名することにしたい。(矢部・斎藤, 1994)

ここで、矢部は障害のとらえ方として1980年の WHO 国際障害分類 (ICIDH: International Classification of Impairments, Disabilities and Handicaps) を紹介し、「体育、スポーツ活動は、低下した日常生活能力や職業能力をいかに環境に適応させるか、いわば人間個体の適応性

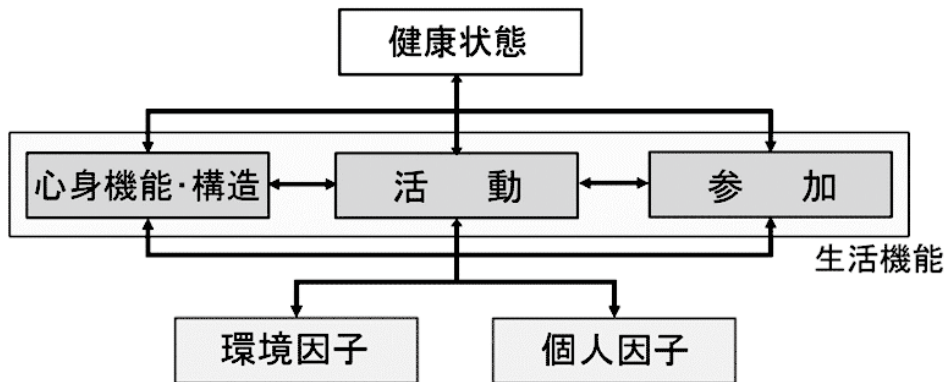


図 ICFの生活機能モデル (大川, 2006)

(adaptation) を高めることに関わっています。」としている。これだけを見ると、障害者自身を環境、つまり既存のスポーツのルールや用具に適応させなくてはならないかのように見える。

しかし、そのすぐ後で「具体的には、運動の種類や方法を障害の種類や程度、あるいは本人の能力や好みにアダプト (adapt: 適応, 適合, 合わせる) させることです。」と述べ、運動をする者に運動の種類や方法を合わせることとしている。これは ICIDH の改訂版である 2001 年の WHO 国際生活機能分類 (ICF: International Classification of Functioning, Disability and Health) (図) を先取りした考え方ともいえる。

図の中央の「心身機能・構造」「活動」「参加」の 3 つを含む包括概念が「生活機能」であり、「人が生きること」の全体を示す。心身機能は手足の働きや精神の働き、視覚・聴覚の機能を示し、構造とは手足の一部、心臓の一部など体の部分のことで示す。活動とは、生活行為、生きていくために基本的に必要な、歩く、食事をする、トイレに行ったり、入浴をしたり、食事を作る、電車に乗るといった行為を示す。スポーツをすることも活動に入る。参加とは人生

の様々な状況に関与し、そこで役割を果たすことを示している (上田, 2005)。

上田は、ICF が ICIDH から進歩した特徴として、「背景因子」である「環境因子」と「個人因子」が導入されたことを挙げている。矢部のいう運動の種類や方法は環境因子に、本人の好みというのは個人因子に該当すると考えられる。障害の種類や程度は心身機能・構造ととらえられる。

つまり、例えば目が見えなくても (心身機能・構造)、ボールを転がすといった方法・ルールの工夫や音の鳴るボールという用具の工夫 (環境因子) があれば、スポーツに参加する (活動) ことが制限されず、チームに加わり、そこで役割を果たす (参加) ことが可能になるのである。さらに、そこには本人の好み (個人因子) も考慮されている。

その後、矢部はアダプテッド・スポーツを以下のように説明している。

どのような障害があっても僅かな工夫をこらすことによって、誰でもスポーツに参加 (Sports for Everyone) できるようになる。  
[中略] / スポーツのルールや用具を障害

の種類や程度に適合 (adapt) させることによって、障害のある人は勿論のこと、幼児から高齢者、体力の低い人であっても誰でもスポーツに参加できるのである。〔中略〕／アダプテッド・スポーツとは、障害のある人がスポーツを楽しむためには、その人自身と、その人を取り巻く人々や環境をインクルージョンしたシステムづくりこそが大切であるという考え方に基づくものである。(矢部, 2004)

つまりアダプテッド・スポーツとは、そのスポーツを実施しようとする人の特性(「心身機能・構造」「個人因子」)に、施設、用具やルール、方法等(環境因子)を適合させたスポーツといえる。

## (2) 対象者

このように、もともとは主に障害者のスポーツを「アダプテッド・スポーツ」と呼び始めたが、その対象者は幅広くとらえられるようになってきている(注2)。

障害を持つ人(低高齢者を含む)を対象(矢部・斎藤, 1994)

障害のある人は勿論のこと、幼児から高齢者、体力の低い人であっても誰でも(矢部, 2004)

身体に障害のある人だけではなく、高齢者や妊婦等、健常者と同じルールや用具の下にスポーツを行うことが困難な人々(中澤, 2006)

障害者や高齢者、子どもあるいは女性等(藤田, 2006a)

障害の有無、年齢や性の違い、体力の違いがあっても(臼井, 2006)

個々人の身体状況に応じて(藤田, 2008)

障害のある方々を含めて一人ひとりに(安

井, 2008)

全ての人を対象(金山・山崎, 2009)

障害の有無しに関係なく、あらゆる年齢(三浦・小田, 2010)

年齢・性別・身体能力・知的能力などの差異に関係なくあらゆる人(永浜, 2013)

障害のある人だけではなく、高齢者や妊婦など各種運動の実施に際し、道具やルールあるいは実施法などに何らかの配慮が必要な人たちすべて(中澤, 2014a)

実践する人(斎藤, 2014)

実践者(大山, 2015)

疾患や障がいをもった方のための特別なものではなく、幅広い世代、運動・スポーツに苦手意識を感じている方や様々な身体機能のレベルの方(塩田, 2015)(注3)

障害の有無を問わず、多くの人(田中, 2016a)

あらゆる人(植木, 2017)

藤田(2008)は、「<sup>アダプテッド</sup>障害者スポーツの世界 アダプテッド・スポーツとは何か」(注4)の巻頭言で以下のように述べる。

アダプテッド・スポーツとは聞きなれない言葉です。『最新スポーツ科学事典』(平凡社)には「障害者や高齢者、子どもあるいは女性等が参加できるように修正された、あるいは新たに創られた運動やスポーツ、レクリエーション全般を指す言葉」と定義されています。簡単に言うと、個々人の身体状況に応じて、やりやすいように工夫された運動やスポーツということです。／具体的にはコートを狭くしたり、ボールを軽くしたりして行う子どものスポーツやネットの高さを男性より低くして行う女性のバレーボール、ガイドランナー(伴走者)とともに走る視覚障害者マラソンなどのこと

です。

以上のように、アダプテッド・スポーツの対象者は障害者のみならず、すべての人を対象としてとらえるようになってきている。男性と女性のバレーボールのネットの高さの違いもアダプテッド・スポーツであるならば、成長に合わせて、小学生、中学生、高校生、一般とネットの高さが変わるのもアダプテッド・スポーツであるとも言える。延いては、すべてのスポーツはアダプテッド・スポーツであるとも言えるのかもしれない。

### 3. 障害者スポーツをめぐる言葉

これまでみてきた「アダプテッド・スポーツ」以外にも、障害者スポーツに関連する言葉として、パラスポーツやユニバーサル・スポーツなど様々なものがある。ここでは障害者スポーツをめぐる言葉についてみていく。

#### (1) ニュー・スポーツ

稲垣(1995)は「ニュー・スポーツ」とは、オリンピックや世界選手権などで競われる「近代スポーツ」と異なる、もう一つのスポーツの総称だとし、それぞれの特徴の違いを以下のように説明している。

「近代スポーツ」は、「競争原理」を前提にした「勝利至上主義」や「記録主義」を目指し、それに向けて努力し、根性主義を美徳とする。「重厚長大」なるものに価値を置く。近未来に目標を置いた、「上昇志向」のスポーツである。一方、「ニュー・スポーツ」は競争性を抑え、勝ち負けにこだわらず、日常的に楽しめるスポーツを目指し、「いつでも、どこでも、だれでも」気軽にできることをセールス・ポイントとする。「軽薄短小」なるものに価値を置く。「現在」に目標を置いた、「下降志向」のスポーツである。

この「下降志向」は、『加齢』を受け入れるスポーツ」の提案にもつながる。

人間のからだの成長は25歳で完了するという学説に従えば、幼児から25歳までは「上昇志向」のスポーツが適しているとしても、26歳を過ぎたら、どちらかといえば「下降志向」のスポーツの方が適していることになる。(稲垣, 1995)

稲垣は、高齢化社会に向けて、加齢による身体機能の低下に対するスポーツの重要性を訴えた。「上昇志向」とされる近代スポーツの競技をアレンジしたものではなく、より積極的に「下降志向」のスポーツを開発し、提供していくことが必要だとしている。

また、ニュー・スポーツは「いつでも、どこでも、だれでも」できるスポーツ、用具や施設も簡単、ルールも簡単、特別な技術も必要とせず、年齢性差も問わない「軽スポーツ」を意味していると述べている。

野々宮(2000)は、ニュー・スポーツを以下のように説明している。

「スポーツを楽しもうとする人に、スポーツの意味や方法、条件などを適合させようとする努力によって、生み出され、形づくられてきたもの」と、とらえてみることを提案したい。言い換えるならば、ニュースポーツとは、「対象に敵ったスポーツを生み出そうとする時代精神によってもたらされたもの」といってよいであろう。／それゆえ、この時代精神を貫く原理は競技スポーツ(近代スポーツ)の「競争原理」に対して、「適合原理」と表現してみることができよう。適合原理の意味するところは、障害者スポーツの歩みにもよく現れている。(注5)

障害者スポーツは、「老年障害者」というとらえ方も含め、広く障害をもった人の身体機能に、スポーツの用具やルールを適合させる (adapt) ことに力点が置かれた。それが一定の普及レベルに達した段階で、アダプティブ・スポーツ (注6)、アダプテッド・スポーツといわれるようになった。そこで、単なる傍流、オルタナティブな存在から主流と同等の意味を持つ存在になったと、野々宮は指摘している。

近代スポーツを育み、競争原理 (近代原理) が極限状態を迎えるようになった20世紀半ばころから、ニューなるものが登場した。ニューには、大きな論点の一つであった、厳しい鍛錬主義や記録し評価がつきまとうようなものに対して、遊びとして、それ自体を楽しむ活動の自己目的性を相対的に大きくするような配慮が働いたことがわかる。それは、ルールに工夫をこらすことによって、競技性を緩和し、共同、共生意識の比重を高め、用具を軽くしたり柔らかくすることにつながった。そして、主として男性中心の、一定の条件をそなえた者同士が切磋琢磨するものだけではなく、だれもが楽しめるようなものも社会的に用意できるようになった。よい意味での多様化といえよう。(野々宮, 2000)

さらに、野々宮はニュー・スポーツの分類を以下のように提案する。

①国内外を問わず最新の科学技術の成果、新しい発想などによって最近生まれた広義のスポーツ。／②広義の身体文化として国内外を問わずにこれまで存在し、一部の人や国では行われていたものが、見直されたり手直しされたりして最近普及するようになった広義のスポーツ／③既存のスポー

ツ、成熟したスポーツを簡易化したり、組み合わせたり、工夫改良したりして多様なニーズに応えられるようにした広義のスポーツ。(野々宮, 2000)

つまり、若く鍛え抜かれた身体・精神をもつ男性がスポーツ実施の中心であった近代スポーツに対し、女性、子どもから高齢者、障害者も対象としたスポーツがニュー・スポーツと言えるであろう。

師岡はニュー・スポーツの定義は多様であるとしながらも、日本での意味を整理している。

1. 新しくできたスポーツ／2. 日本に紹介されてから比較的まだ新しいスポーツ／3. いつでも、どこでも、だれにでも楽しめるスポーツ／4. スポーツ本来の意味「日常と違うところに心と体を運ぶ (スポーツの語源 紀元前5世紀ころのラテン語 *deportare* の意味) = 楽しみ、気晴らし、暇つぶし、慰みなど」を日本人にとっての新しい概念としてとらえた「新しい概念を大切に作るスポーツ (New Concept Sports)」／実はこれらの条件はすべてのスポーツが持つ、あるいはもともと持っていたものである。(師岡, 2017)

これらの意味を踏まえ、師岡は「パラリンピック競技はユニバーサルスポーツであり、ニュースポーツそのものである」「ニュースポーツは、『競技スポーツ』にも『生涯スポーツ』にも『レクリエーションスポーツ』にも『障がい者スポーツ (アダプテッドスポーツ)』にもなる可能性があるのである」と述べている。

## (2) バリアフリー・スポーツ

日本体育学会が監修する2006年発行の「最新スポーツ科学事典」には、「バリアフリー・ス

ポーツ」の項目はないが、「バリアフリー」「障害者スポーツ」の項目本文の中に以下のような記述が見られる。

障害者スポーツ：障害者スポーツは多義的であり、これを表す語もリハビリテーション・スポーツ、医療体育、適応体育、バリアフリー・スポーツなど多様である。(藤田, 2006b)

バリアフリー：障害の有無や年齢等に関係なく、すべての人に使いやすかつくられたものをいう。これらの言葉の意味を生かしたバリアフリー・スポーツ、ユニバーサル・スポーツという言葉も近年使われている。(藤田, 2006c)

金山・山崎(2010)は、各大学のアダプテッド・スポーツに関連する教科のシラバス記載状況を分析し、内容をカテゴライズしている。その中で、「バリアフリー・スポーツ体験」として、「視覚を制限して歩く、走ること」や「フライングディスク」を挙げている。

さて、川内は、バリアフリーを以下のように説明している。

バリアフリーとは、高齢の人や障害のある人が社会への関わりを持とうとしていくときに社会の側でそれを妨げてしまう現実があるとの認識のもとに、その妨げるものをバリア(障壁)と呼んで、バリアをなくすること(バリアフリー)で社会に関わりやすくする環境を整えようという考えで使われています。(川内, 2001)

具体的な例として、物理的なバリア(障壁)を挙げると、建築物に階段があり、この段差(バリア)を解消する(フリー)ためにスロー

プやエレベーターを設置することがバリアフリーである(盛山, 2011)。

ここから、高齢者や障害者が参加できるように施設、ルールや用具、方法などが工夫されたスポーツがバリアフリー・スポーツであると言える。

### (3) ユニバーサル・スポーツ

藤田(2006c)は最新スポーツ科学事典の項目本文の中で、バリアフリー・スポーツと並び「ユニバーサル・スポーツ」という言葉も取り上げている。この「ユニバーサル」という語を川内は、以下のように説明している。

ユニバーサルとは、バリアフリーのように高齢の人や障害のある人だけを対象とするのではなく、みんなにとっていいものを考えようというところからスタートしています。従ってユニバーサル・デザインは「みんなのためのデザイン(Design for All)」とも言われています。(川内, 2001)

「ユニバーサル・スポーツ」も、「最新スポーツ科学事典」の項目としては、取り上げられてはいませんが、様々な定義が試みられている。

従来あるスポーツや障害者のスポーツを、障害者や健常者が出来るようにするという発想ではなく、誰もが参加可能なスポーツという意味で考えられたもの(藤井, 1999)。そこに集う誰もがいっしょに楽しむことができるようなスポーツ(抜屋, 2017)。様々な個性や能力に関わらず、あらゆる人にとって楽しめるスポーツ(秋政・小野, 2010)。高齢になっても、障害があっても、大人でも子どもでも、みんなが一緒に参加し、活動できるスポーツ。競技性の高い元気で若い人中心の一般的なスポーツや、パラリンピックを代表とした障害者スポーツのちょうど中間に位置するようなスポーツ。障害のあ

る人もない人も共にできるスポーツであり、スポーツの得意な人もそうでない人も一緒にできる、レクリエーションやコミュニケーションを目的としたものまで含まれる（ユニバーサルイベント協会, 2007）。

これらから、ユニバーサル・スポーツは、障害者と健常者という括りでとらえるのではなく、みんなが一緒に参加できるスポーツであるといえる。しかしながら、みんなが一緒に参加できるスポーツを、そこにいる全員が同じ楽しみ方をするのは困難のように思われる。みんなが参加できるようにすることで、ある者にとっては、課題が容易すぎる場合も出てくる。

川内はユニバーサルデザインについて、以下のように述べる。

結論からいってしまえば、すべての人のニーズに対応できる、これがユニバーサルデザインだという決定版はできないだろうと思う。それほど人のニーズは多様であるということだが、逆にいうとニーズが多様であるがゆえにどのようなものがユニバーサルデザインかということを確認に提示できないという、非常に分かりにくい欠点を持っている。〔中略〕／ユニバーサルデザインを理解するのにもっとも重要なことは姿勢であろうと思われる。／100点満点の決定版はできないかもしれないけれど、一人でもより多くの人が使えようと改良を重ねていく姿勢、〔中略〕着実に使える人を増やしていこうとする姿勢、それこそがユニバーサルデザインなのである。／〔中略〕ポイントは、ひと種類のいすでは限度があるということを確認し、どうしたらより多様なニーズに応えられるかを考えて改良を続けていく「姿勢」なのである。（川内, 1998）

ユニバーサル・スポーツも同様に、多様なニーズに応じていこうとする姿勢が重要であるといえる。

西山（2001）は、「ユニバーサルデザインは、通常デザインの目標とされる『普通の人』という対象の虚構性を批判して生まれたものである」としている。「普通の人」という、主に男性で、中肉中背、健康で精神的にも安定しためったに存在しない人間のことを対象にしたデザインではなく、ユニバーサルデザインでは現実に存在する多様な属性をもつ人を対象にしている。このような発想からユニバーサルデザインされたスポーツを「ユニバーサルスポーツ」と提唱している。

田中（2016b）は、これについて「『近代スポーツ』もまた、この『普通の人』という幻想をもとに発展してきたと言える。普通でない人は対象外であったために、スポーツ実践で言えば、身体的に何らかの弱さを抱えている人は、そもそも（近代）スポーツ実践の対象外であった」と指摘している。ここに、ニュー・スポーツと同じ発想をユニバーサル・スポーツにみることができる。

師岡（2017）が「パラリンピック競技はユニバーサルスポーツであり、ニュースポーツそのものである」と述べる所以がわかるであろう。

#### （4）リバース・インテグレーション

関根・西村ら（2003）は、アイススレッジホッケー（現パラアイスホッケー）のような障害者向けに作られたスポーツに、多くの健常者が参加することで、それが「ユニバーサル・スポーツ」として普及するのではないかと期待している。

パラアイスホッケーとは、スレッジ（ソリ）に乗り、下肢が固定された状態で、2本のスティックを用い滑り、スティックの逆側のブレードと呼ばれる部分でパックを相手ゴールに



シュートするというスポーツである。

この、もともとは障害者向けに作られたスポーツに、障害のない者が参加することは「リバース・インテグレーション」と呼ばれることがあり、「最新スポーツ科学事典」の項目としても取り上げられている。

リバース・インテグレーション：障害のある人の集団に障害のない人が入ってかわりを持つ逆統合のこと。〔中略〕スポーツ界では障害者スポーツに障害のない人が参加することをいう。車椅子バスケットボールや車椅子ロードレース、フロアバレーボール（視覚障害者のバレーボール）等では障害のない人が出場できる試合もある。統合を進め、ノーマライゼーションを推進する手段の1つと考えられる。（藤田，2006d）

藤田はこの中で、「ただし海外ではこれにより障害のある人の参加が阻害された事例も」あったと注意を促している。

さて、インテグレーション（integration）とは、ノーマライゼーション原理の教育への適用として主張された概念である（清水，2009a）。インテグレーション（統合教育）は、障害児に対して健常者と同じ場で特別な教育を行うことである。そこでは、障害児と健常児は異なる存在として区別されている。そのため、実質的に健常児のための教育に障害児を同化することを強いるような教育（齋藤・トート，2010）、障害児の通常教育への一方的適応を求めるもの「あてはめ」（清水，2009b）といった批判があった。

リバース（reverse）というのは、英語で逆にすること、反対方向に動かすことを意味する。つまり、障害のない人が障害のある人のスポーツに参加するという考え方は、みんなが一

緒に楽しむという「ユニバーサル・スポーツ」の考え方は方向を異にしているであろう。なお、「インテグレーション・スポーツ」という言葉の使用は管見ではあるが、見当たらなかった。

### （5）インクルーシブ・スポーツ

「インクルーシブ・スポーツ」も、「最新スポーツ科学事典」の項目として取り上げられるには至っていないが、様々な定義が試みられている。

障害者を特別視せず、障害の有無や年齢、性別にかかわらず、全ての人々を包括した（inclusive）スポーツ（神埜ら，2008）。子供から高齢者まで、障害のあるなしにかかわらず、プレイできる（中村，2008）。

1994年の「サラマンカ宣言」以降、インクルージョン（インクルーシブ教育）が市民権を得た。インクルージョン（インクルーシブ教育）とは、特別ニーズ教育などの充実により、すべての学校が多様な差異やニーズを有する子ども一人ひとりの尊厳と価値を認め、適切な学習と発達、協働と連帯を保証する場になっていくことである（高橋，2007）。また、障害児、健常児という区別なく、ひとり一人異なるニーズに対応した教育を実践していく中で、全ての子どもに平等な学習機会が保障され、子ども達が互いに平等に学び合う（協働）中で展開していく教育である（齋藤・トート，2010）。

金山（2016）は、日本における障害者スポーツについても、「分離」から「インテグレーション（統合）」「インクルージョン（包摂）」の順に概念が導入され、具現化されてきたとしている。「インテグレーション（統合）」は、各人の障害や個性といった「違い」に注目し、用具やルールを用いてスポーツに適応させるものである。一方、「インクルージョン（包摂）」は、「違い」よりも先に「共通項」を見出し、「誰も

が」使える用具やルールを考えていこうとすると指摘する。また、これは「バリアフリー」から「ユニバーサルデザイン」への転換にも重なるという。

したがって、インクルーシブ・スポーツとは、全ての人を包摂したスポーツであり、一人一人のニーズに合わせたスポーツと言える。そのスポーツを実践していく中で、全ての人が互いに楽しみながら成長することが期待されている概念であろう。

「インクルーシブデザイン」という言葉もある。これはアメリカで生まれた「ユニバーサルデザイン」に対し、イギリスで生まれた。それぞれ発展の仕方や表現は異なるものの、同じ目的を有している(カセム, 2014)。それと同様に、インクルーシブ・スポーツとユニバーサル・スポーツの考え方は、大変似ており、その違いについてはさらなる検討が必要である。

Ghotbi, Macdonaldらはインクルーシブ・スポーツについて以下のように述べている。

日本ではまだあまり進んでいないが、参加者を障がい者と健常者に区別しないトライアスロン競技のようなインクルーシブスポーツは、障がい者のコミュニティだけでなく、一般の人々にも、健康に関して新しい見方を提供する。〔中略〕インクルーシブスポーツが可能になった要因の1つに、補装具のハイテク化がある。〔中略〕身体の一部の障がいを補うための新技術が利用しやすくなり、障がい者と健常者が共に参加する環境整備がなされ、高齢化社会に伴い高齢者と共に生きることが普及して、健康については日本社会に良い影響を与えている。

インクルーシブスポーツは、リハビリ努力でよくなった障がい者アスリートに、健常

者と再び統合されるという、複雑な感情的、心理的、そして身体的な挑戦を克服することを要求している。これはまた、障がい者に自信を持たせ、社会に受け入れられることに役立っている。従って、インクルーシブスポーツは、障がい者についての社会認知を肯定的にするという影響を与えている。(Ghotbi, Macdonaldら, 2008)

ここでいわれているインクルーシブ・スポーツとは、健常者のスポーツへの統合のように思われる。ハイテク補装具を使用することで、障害者が健常者の大会に出場すること、つまりインテグレーションを目指しているのであり、全ての人を包摂するという概念とは異なるように思われる。

また、障害のある選手にも障害のない選手と同様に、海外で活躍できるような機会を与えたいという思いから始められたイベントが、オンライン新聞に取り上げられた。そこには、

スポーツの「インクルーシブ」化が着々と進み始めている。英語の「インクルーシブ」とは、日本語訳すると「全てを含んだ」といった意味で、近年では「インクルーシブ教育」という言葉がよく聞かれる。障害のある子供たち、障害のない子供たちがともに学べる環境を提供する教育システム。そのスポーツバージョンが、「インクルーシブ・スポーツ」だ。／全ての人々が平等にスポーツのできる環境をつくる。〔中略〕トップアスリートが若い年齢から海外に羽ばたく時代になってきている。そうした機会を障害のある選手達にも提供し、「インクルーシブ」な環境をつくるのが、車いすグローバルチャレンジの意義でもある。(齋藤, 2018)

ここで言われていることは、障害者への健常者と同等の環境や場の提供であって、ノーマライゼーションに近い考え方であり、インクルージョンの考え方とは異なっているように思われる。

2014年に国際陸上競技連盟主催の（IAAF：International Association of Athletics Federation）のダイヤモンドシリーズグランプリと国際パラリンピック委員会（IPC：International Paralympic Committee）主催のグランプリファイナルが、イギリスのバーミンガム市で同時開催された。障害のないトップ選手と、障害のあるトップ選手が同じ時間同じ場所ですべての大会に出場した。これを井上（2015）は、「陸上競技会のエリートアスリートによるインクルーシブスポーツが実現された」と指摘する。また、2014年障害者スポーツの管轄が厚生労働省管轄から文部科学省へと移管されたことを「インクルーシブスポーツの潮流を受けて」のことであると述べている。

このように、現在、インクルーシブ・スポーツという言葉の使われ方は様々で、定義も曖昧である。今後、さらに全ての人を包摂したスポーツの発展やスポーツ実施環境の整備が進んでいくことが望まれる。それが実現すれば、定義も明確になっていくことであろう。

#### （6）パラスポーツ

2014年3月「公益財団法人日本障害者スポーツ協会」が「公益財団法人日本障がい者スポーツ協会」と名称を改め、英語表記も「Japan Sports Association for Disabled（略称 JSAD）」から「Japanese Para-Sports Association（略称 JPSA）」へと改めた。この変更について、日本障がい者スポーツ協会（2014）は以下のように述べている。

障がい者を表す「the disabled」について

は、IPCにおいて不適切な単語とされています。一方で「障がい者スポーツ」については、「Para-Sports」を推奨しています。このことから英語表記を改めることとしました（「Para」は「もうひとつ」を意味し、「Para-Sports」で障がい者スポーツを表します）。

高橋によると、「パラスポーツ」という言葉は、国際的には2001年に北京でのパラリンピック開催が決まり、オリンピック組織委員会とパラリンピック組織委員会が一緒になってこの大会を運営することが決まった頃から使われるようになったと指摘されている。日本では、東京オリンピック・パラリンピックの開催が決まった2013年頃から使われ始めたという（永浜・木村ら、2016）。

2017年8月に実業之日本社から「障がい者スポーツ&ライフスタイルマガジン パラスポーツマガジン」というタイトルの障害者スポーツ専門雑誌が発刊されている。

また、東京都は2016年から、2020年に向けて都民・国民の障害者スポーツに対する関心を高めるために「TOKYO パラスポーツプロジェクト」を開始した。その一環としてファンサイト「TEAM BEYOND」を立ち上げている。このサイトでは、「パラスポーツ」という言葉をパラリンピック競技に限定せず、広く障害者スポーツを表す言葉だとしている（オリンピック・パラリンピック準備局、2016a・2016b）。しかしながら、「パラ」という言葉はパラリンピックを連想させ、障害のある人が行う競技性の高いスポーツを示す言葉という印象を受ける。「パラスポーツ」の選手を「パラアスリート」と呼ぶことにもそれは現れている。水原（2017）も「障がい者スポーツ＝パラスポーツではないので、難しく考えずにスポーツに親しんでほしい」と述べる。

竹内は、2004年に夏に開かれたアテネ大会以降、パラリンピックは競技性がより高まったとしている。

その象徴となったのが、2012年のロンドン大会です。パラアスリートたちを「スーパーヒューマン（超人）」として捉えたキャンペーンは、一大旋風を巻き起こし、パラスポーツへの見方や障害者に対する意識を大きく変えました。その意味では、キャンペーンを張ったイギリスの公共放送 Channel 4 の功績は大きかったと言えます。／しかし、その一方で看過できないデータもあります。あまりにパラアスリートたちを「スーパーヒューマン」にしてしまったために、そうした高度な運動能力がない、いわゆる“ふつう”の障害者への差別や偏見が助長されたというものです。つまり、障害者は「スーパー」でないと価値がないという風潮がイギリス国内で広まったというのです。（竹内、2018）

これでは、適合原理のニュー・スポーツから競争原理の近代スポーツへと逆戻りになりかねない。競技性の高いスポーツにだけ注目が集まり、それに参加できない障害者が忘れられてはならないであろう。中澤（2014b）も、パラリンピックの認知度が高まることは、障害のあるアスリートの活躍が人々に知られ、アダプテッド・スポーツの市民権が確立されるとしている。しかし、一握りの選手の陰にはアダプテッド・スポーツを必要とする多くの障害者がいることを忘れてはならないと注意している。

そのような中、伊藤（2015）は、障害のある人のスポーツが特別な名前では呼ばれるのではなく、単に「スポーツ」と呼ばれることを目指し、「パラスポーツ」という言葉には「障がい者スポーツ」と「スポーツ」の「中継ぎ」の役割を

任せたいと述べる。伊藤は2012年にその著書の中で、「障害者スポーツ」という言葉が時代にそぐわないと述べている。1964年の最初の東京パラリンピックの頃は、障害者がスポーツをすることなど考えられなかった時代であった。そのため障害者にできるスポーツがある、障害者にもスポーツをする権利があるということを示すためには「障害者スポーツ」という言葉が必要であった。現在、国民の多くは障害者がスポーツをすることを認識している。さらには、2011年に施行された「スポーツ基本法」にもその言葉は使われていないことを指摘している。「スポーツは、障害者が自主的かつ積極的にスポーツを行うことができるよう、障害の種類及び程度に応じ必要な配慮をしつつ推進されなければならない」と、基本理念の中にも示されるように、障害者がおこなうのは「スポーツ」であると主張している（伊藤、2012）。

#### （7）様々な呼び方

近年、企業において多様な人材を活用しようという考え方である「ダイバーシティ（diversity：多様性）」とスポーツを合わせた言葉も登場している。「国籍・肌の色・障がい・性別・高齢・SOGI（Sexual Orientation・Gender Identity）・ドロップアウトなど全ての壁を取り払い、誰もが『ありのままに』『自分らしく』思いきりスポーツを楽しむことが出来るスポーツ界」を目指す「非営利活動法人日本ダイバーシティ・スポーツ協会」が2017年に設立されている（日本ダイバーシティ・スポーツ協会、2017）。

鈴木（2017）は、受講生全てが楽しめる、普通とは一味違ったスポーツを取り入れたいという思いから、ボディコンタクトの多いボールゲームを簡素で安全にしたものや、障害者と健常者が一緒に参加できるシッティングバレーボール、風船バレー、ブラインドサッカー、車

椅子バスケットボールをとりいれた授業の名称を「オルタナティブスポーツ」と名付けている。

これらのように、障害者スポーツに関連する用語は、一般に浸透していないものも含めたくさんある。

#### 4. まとめ

上田 (2005) は ICF (図) を「障害の分類」ではなく、「すべての人の生きることの分類」だと指摘している。「生活機能の低下」「生きることの困難」を起こす原因は、疾患や変調、妊娠や加齢、ストレス状態などの「健康状態」も関連している。「生活機能」はその時、その時で変化してくるものである。それぞれの人の「生活機能」に個人因子としての好みを考慮しつつ、環境因子としての施設や用具、ルール、方法を工夫しつつ、その人に適合したスポーツを実施することが当たり前になれば、「アダプテッド・スポーツ」「ニュー・スポーツ」「ユニバーサル・スポーツ」…といった用語は必要なくなるであろう。全てが「スポーツ」に集約されていくかもしれない。全ての人が「いつでも、どこでも、だれとでも」スポーツを実施できることが当たり前になれば、スポーツの特別な呼び方はなくなるのかもしれない。

#### 【注】

- 1) 朝日新聞デジタルは「パラスポーツ」と「パラスポーツ 障がい者スポーツ特設ページ」、YOMIURI ONLINE では「オリンピック・パラリンピック 障がい者スポーツ」、日本経済新聞電子版は「Go20チャレンジ!パラスポーツ最前線」、デジタル毎日「パラリンピック」、産経ニュースは「パラスポーツ」というカテゴリーを設けている。

<http://www.asahi.com/sports/parasports/>

<http://www.asahi.com/sports/events/parasports/>

<https://www.yomiuri.co.jp/olympic/para->

[sports/](https://www.nikkei.com/sports/go20/column/?uah=DF280920154832)

<https://www.nikkei.com/sports/go20/column/?uah=DF280920154832>

<https://mainichi.jp/sportsspecial/paralympics/>

<https://www.sankei.com/sports/parasports.html>

(2018-9-13参照)

- 2) アダプテッド・スポーツの提唱者である矢部は、提唱後も一貫して、主たる対象者を障害者、高齢者としている。アダプテッド・スポーツとは障がい者（部分的な機能低下）や高齢者（全体的な機能低下）などの身体能力の低い人を対象としたスポーツ（主体的な身体活動）である。〔中略〕／このように身近な障がい者や高齢者の QOL の向上や、加齢に伴って発生する障がいの軽減および予防を支援することがアダプテッド・スポーツの目的である。〔中略〕／このような障がい者や高齢者を対象とするアダプテッド・スポーツは、健常者（児）を対象とする体育・スポーツと同様に、身体活動を通じて人間の健康と体力の維持増進に働きかけることを目的としている（矢部，2015）。矢部は障害者に対する指導法は、健常者でも初心者や高齢者などの低体力者を対象にした場面にフィードバックできる（矢部，2004）と考えている。障害者・高齢者に対するルールや用具の工夫・変更が全ての人に応用できるとする考え方である。
- 3) 近年、法律等に基づいて「障害者」と表記する場合以外では、「障害」を「障がい」と表すことが多くなっている。筆者は、生きていく上でなんらかの「障壁・障害」のある人という意味で、「障害者」「障害」を使用する。なお、引用箇所については原文のままとする。
- 4) 本書はアダプテッド・スポーツの中でも、障害のある人のスポーツに焦点を絞った内容となっている。しかし、障害者スポーツでもアダプテッド・スポーツでもなく、「障害者スポーツ」と表記した理由を藤田（2008）は、障害者スポーツは障害者だけが行う特別なスポーツではなく、「アダプテッド・スポーツ」

は言葉の響きが新鮮で、新しい可能性を秘めた明るいイメージがあるとともに、発展途上にある言葉であるため、としている。

- 5) 本稿では、「ニュー・スポーツ」と「ニューススポーツ」のように表現のゆらぎがある場合、外来熟語の単語の区切りとして「・」を用いた方を使用した。引用の場合は原文のままとした。
- 6) 日本で初めて障害者スポーツを専門に扱った雑誌「アクティブジャパン」(1995年～1998年に発行)の編集長だった山崎泰広が用いていた言葉である。アダプテッド・スポーツと同義である。
- 欧米では「障害者スポーツ」という名称も、「アダプティブ・スポーツ」という名称に変わってきています。「アダプティブ」というのは「適応する」という意味〔略〕(山崎, 1999)

#### 【参考文献】

- Ghotbi Nader・Macdonald Alastair S・早田愛一郎・中村太郎・Cassim Monte (2008) 日本の障がい者スポーツの強化について：インクルーシブ手法による健康と能力の再定義. 日本臨床スポーツ医学会誌. 16 (3) : 300-305.
- 秋政邦江・小野擴男 (2010) 医療系大学における「健康体育」授業への車いすダンスの導入 - ユニバーサルスポーツの有効性 -. 川崎医学会誌一般教養篇, 36 : 27-37.
- 天兒民和 (1964) 巻頭言. 身体障害者スポーツ, 中村裕・佐々木忠重編, p-, 南江堂.
- 伊藤数子 (2012) ようこそ、障害者スポーツへ パラリンピックを目指すアスリートたち. pp146-154, 廣済堂出版.
- 伊藤数子 (2015) 「障がい者スポーツ」から「パラスポーツ」へ ～名称変更の理由～. SPORTS COMMUNICATIONS, <https://www.ninomiyaasports.com/archives/15257> (2018- 8 -28参照)
- 稲垣正浩 (1995) スポーツの後近代 - スポーツ文化はどこへ行くのか -. 三省堂.
- 井上明浩 (2015) 国際試合におけるインクルーシブスポーツの調査研究 -Sainsbury's Birmingham Grand Prix 大会の状況 -. 金沢星稜大学人間科学研究, 8 (2) : 35-40.
- 植木章三 (2017) 第1章アダプテッド・スポーツ総論. イラスト アダプテッド・スポーツ概論, 植木章三・曾根裕二・高戸仁郎編, p1, 東京教学社.
- 上田敏 (2005) ICF (国際生活機能分類) の理解と活用 - 人が「生きること」「生きることの困難 (障害)」をどうとらえるか. きょうされん.
- 白井永男 (2006) アダプテッド・スポーツの概念. 保健の科学, 48 (8) : 556-559.
- 大川弥生 (2006) ICF (国際生活機能分類) - 「生きることの全体像」についての「共通言語」 -. 第1回 社会保障審議会統計分科会 生活機能分類専門委員会, 厚生労働省, <https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000002ksqi-att/2r9852000002kswh.pdf> (2018- 9 -18参照) "
- 大山祐太 (2015) 大学資源活用によるアダプテッド・スポーツの振興とその意義. 芸術・スポーツ文化学研究. 北海道教育大学岩見沢校 芸術・スポーツ文化学研究編集部会編, pp65-67, 大学教育出版.
- オリンピック・パラリンピック準備局 (2016a) 障害者スポーツのファンサイトを開設します. 報道発表資料, 東京都, <http://www.metro.tokyo.jp/tosei/hodohappyo/press/2016/10/07/03.html> (2018- 9 -24参照)
- オリンピック・パラリンピック準備局 (2016b) パラスポーツのファンサイト「TEAM BEYOND」始動. 報道発表資料, 東京都, <http://www.metro.tokyo.jp/tosei/hodohappyo/press/2016/11/11/07.html> (2018- 9 -24参照)
- ジュリア・カセム (2014) イギリスで生まれたインクルーシブデザイン. インクルーシブデザイン 社会の課題を解決する参加型デザイン, Julia Cassim・平井康之・塩瀬隆之・森下静香編, pp12-13, 学芸出版社.
- 金山千広 (2016) 障がい者も健常者も共に楽しめるスポーツ施設とは. RADIANT 立命館大学研究活動報, <http://www.ritsumei.ac.jp/research/radiant/>

- sports/story2.html/ (2018-8-29参照)
- 金山千広・山崎昌廣 (2009) 特別支援教育を踏まえた体育授業と教員養成 -小・中学校教員養成コースにおけるアダプテッド・スポーツ教育の実施状況-. 聖和論集, 37: 9-18.
- 金山千広・山崎昌廣 (2010) 特別支援教育を踏まえた小・中学校の体育教員養成に対する大学教員の意識. 聖和論集, 38: 19-27.
- 神埜聖治・神埜奈美・吉田宗人・田島文博 (2008) 身体障害者スポーツの概要. 総合リハビリテーション, 36 (9): 827-830.
- 川内美彦 (1998) 第2章 ライフスパンを見据えたデザイン. ユニバーサルデザインとはなにかバリアフリーを超えて, 古瀬敏編, pp67-70, 都市文化社.
- 川内美彦 (2001) ユニバーサル・デザイン バリアフリーへの問いかけ. pp7-8, 学芸出版社.
- 齋藤正典・Toth Gabor (2010) デンマークにおける乳幼児期のインクルーシブ教育・保育. 相模女子大学紀要, A, 人文系, 73A: 59-70.
- 齊藤まゆみ (2014) 特別支援学校の体育. 体育の科学, 64 (6): 402-405.
- 斎藤庸裕 (2018.1.9) 車いすテニスのインクルーシブ化へ国際親善試合開催. 日刊スポーツ, <https://www.nikkansports.com/olympic/paralympic/news/201801090000450.html> (2018-8-29参照)
- 塩田琴美 (2015) 障がいを超えた生涯のスポーツとしての可能性 -疾患や障がいを有する方の身体活動増進に向けた環境整備の取り組み-. 早稲田大学 競技スポーツセンターニュース, <https://www.waseda.jp/inst/athletic/news/2015/06/29/1242/> (2018-9-13参照)
- 清水貞夫 (2009a) ノーマライゼーション. 改訂増補版 キーワードブック障害児教育 -特別支援教育時代の基礎知識, 清水貞夫・藤本文朗編, p13, かもがわ出版.
- 清水貞夫 (2009b) インクルージョンとインクルーシブ教育. 改訂増補版 キーワードブック障害児教育 -特別支援教育時代の基礎知識, 清水貞夫・藤本文朗編, p14, かもがわ出版.
- 鈴木直文 (2017) 実践報告:「オルタナティブスポーツ」とは何か. 一橋大学スポーツ研究, 36: 11-18.
- 関根弘和・西村圭治・矢吹知之 (2003) 障害者スポーツからユニバーサル・スポーツへ. PTジャーナル, 37 (10): 882.
- 高橋智 (2007) 第1章 特別支援教育の現状とシステム. インクルージョン時代の障害理解と生涯発達支援, 東京学芸大学特別支援科学講座編, p9, 日本文化科学社.
- 竹内哲哉 (2018) パラリンピックは“共生社会”の扉を開けるか?. すべての人の社会, 38 (5): 10-11.
- 田中愛 (2016a) スポーツ身体論の現象学的考察 -アダプテッド・スポーツ実践に生じる「意味」としての身体に注目して-. 体育・スポーツ哲学研究, 38 (1): 37-50.
- 田中愛 (2016b) 体育・スポーツのユニバーサルデザインに関する基礎的研究. 武蔵大学人文学会雑誌, 48 (1): 274-290.
- 中澤公孝 (2006) アダプテッド・スポーツ. 最新スポーツ科学事典, 日本体育学会編, p17, 平凡社.
- 中澤公孝 (2014a) Adapted physical activityの可能性と課題. 体育の科学, 64 (6): 391-395.
- 中澤公孝 (2014b) アダプテッドスポーツの可能性と今日的課題. 体力科学, 63 (1): 67.
- 永浜明子 (2013) 「アダプテッド・スポーツ」「障がい者スポーツ」に対する大学生の認知度および意識レベル -アダプテッド・スポーツ導入に向けた授業自己評価の観点から(第Ⅲ報)-. 大阪教育大学紀要, 61 (2): 47-60.
- 永浜明子・木村敬一・北田千尋・高橋明・山本博一 (2016) 公開討論会「パラスポーツの未来を考える」の概要. 滋賀県, <http://www.pref.shiga.lg.jp/c/sports/kokutai/jr-youth/files/koukaitouronkai.pdf> (2018-8-28参照)
- 中村太郎 (2008) 障害者スポーツからインクルーシブ・スポーツへ. リハビリテーションスポーツ, 27 (1): 4-7.
- 西山哲郎 (2001) 差異を乗り越えるものとしてのスポーツ -スポーツにおける文化帝国主義とグローバル文化の可能性. スポーツ社会学研究, 9: 106-118.
- 日本財団パラリンピックサポートセンター (2016) リオパラリンピック直前! 企業のCMにも注

- 目！. <http://games.parasapo.tokyo/rioparalympic/column/358/> (2018-9-18参照)
- 公益財団法人日本障がい者スポーツ協会 (2014) 協会名称の変更について. ニュース, [http://www.jsad.or.jp/news/detail/20140331\\_000300.html](http://www.jsad.or.jp/news/detail/20140331_000300.html) (2018-9-24参照)
- 特定非営利活動法人日本ダイバーシティ・スポーツ協会 (2017) 私たちの想い. <http://www.diversity-sports.org/> (2018-9-24参照)
- 抜屋洋子 (2017) 障がい者スポーツの発展へ向けて - 地域スポーツクラブへの障がい者スポーツ導入 -. 生涯スポーツ実践研究年報, 15: 34-39.
- 野々宮徹 (2000) ニュースポーツ用語事典. 遊戯社.
- 藤井由布子 (1999) ESSAY 学校教育関係者に訴えたいこと - ともに学ぶ学校づくりを目指して -. 体育科教育, 9: 22-23.
- 藤田紀昭 (2006a) アダプテッド・スポーツ. 最新スポーツ科学事典, 日本体育学会, p385, 平凡社.
- 藤田紀昭 (2006b) 障害者スポーツ. 最新スポーツ科学事典, 日本体育学会, p385, 平凡社.
- 藤田紀昭 (2006c) バリアフリー. 最新スポーツ科学事典, 日本体育学会, p386, 平凡社.
- 藤田紀昭 (2006d) リバース・インテグレーション. 最新スポーツ科学事典, 日本体育学会, pp386-387, 平凡社.
- 藤田紀昭 (2008) <sup>アダプテッド</sup>障害者スポーツの世界 アダプテッド・スポーツとは何か. pp 3-4, 角川学芸出版.
- 藤田紀昭 (2016) 障害者スポーツ, パラリンピックおよび障害者に対する意識に関する研究. 同志社スポーツ健康科学, 8: 1-13.
- 株式会社ブリジストン (2018) BRIDGESTONE 企業サイトどこまでもいこう. <https://www.bridgestone.co.jp/dokomademo/> (2018-9-18参照)
- 三浦敏弘・小田慶喜 (2010) 障害者スポーツ支援研究 障害者スポーツ研究からアダプテッドスポーツへの展開 - 学生に提供する資料を考える -. 人間健康学研究, 1・2: 1-10.
- 水原由明 (2017) インタビュー: 障がい者スポーツ推進の現状と展望 - 公益財団法人日本障がい者スポーツ協会の取り組みから. 地域リハビリテーション, 12 (11): 900-904.
- 盛山正仁 (2011) バリアフリーからユニバーサル社会へ. p75, 創英社/三省堂書店.
- 師岡文男 (2017) オリンピック・パラリンピックとニュースポーツ. 体育・スポーツ経営学研究, 30: 1-3.
- 安井友康 (2008) アダプテッド・スポーツの心理・社会的効果. 作業療法ジャーナル, 42 (9): 915-919.
- 矢部京之助 (2004) アダプテッド・スポーツとは何か. アダプテッド・スポーツの科学 ~ 障害者・高齢者のスポーツ実践のための理論~, 矢部京之助・草野勝彦・中田英雄編, pp 3-4, 市村出版.
- 矢部京之助 (2015) 医療とスポーツ医科学 ② アダプテッド・スポーツへのスポーツ医科学の応用, 21世紀スポーツ大事典, 中村敏雄・高橋健夫・寒川恒夫・友添秀則編, p338, 大修館書店.
- 矢部京之助・斎藤典子 (1994) アダプテッド・スポーツ (障害者スポーツ学) の提言 - 水とリズムのアクアミクス紹介 -. 女子体育, 36: 20-25.
- 山崎泰広 (1999) 日米の違いから日本の身障者スポーツを考える. 体育科教育, 9: 10-13.
- 特定非営利活動法人ユニバーサルイベント協会 (2007) ユニバーサルスポーツ. <http://u-event.jp/03u-sports/u-sports1.html> (参照2018-8-28)